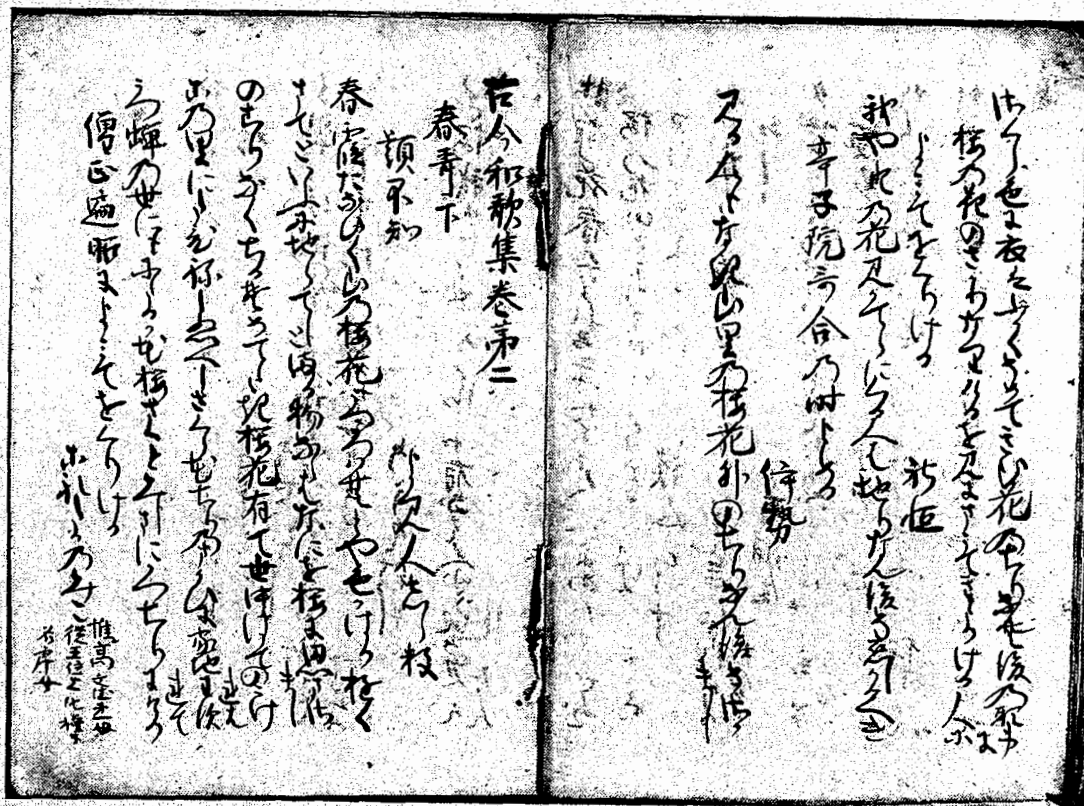


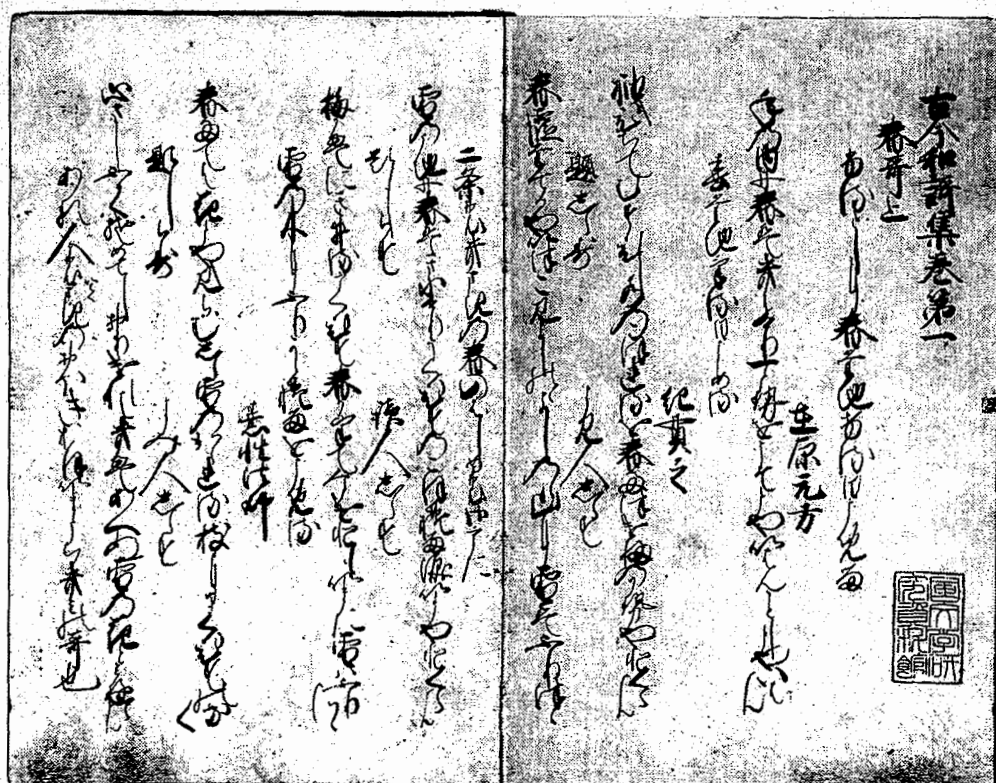
第16回特別展示

古 今 集

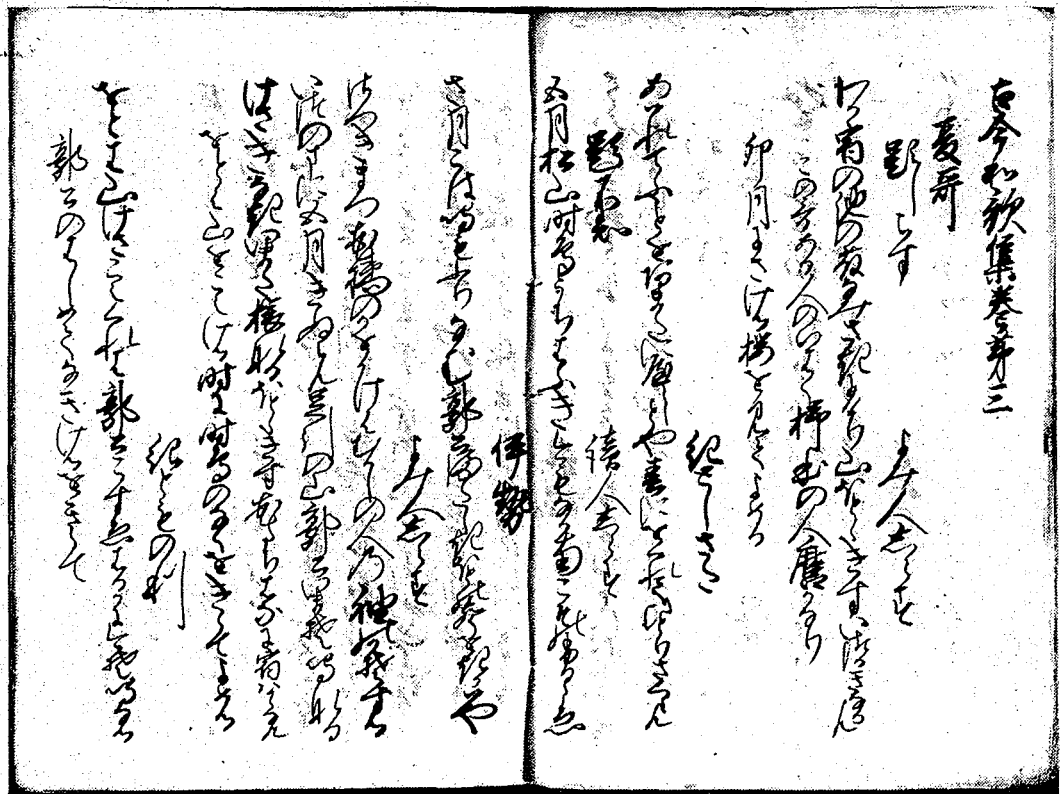
— 初雁文庫本を中心として —



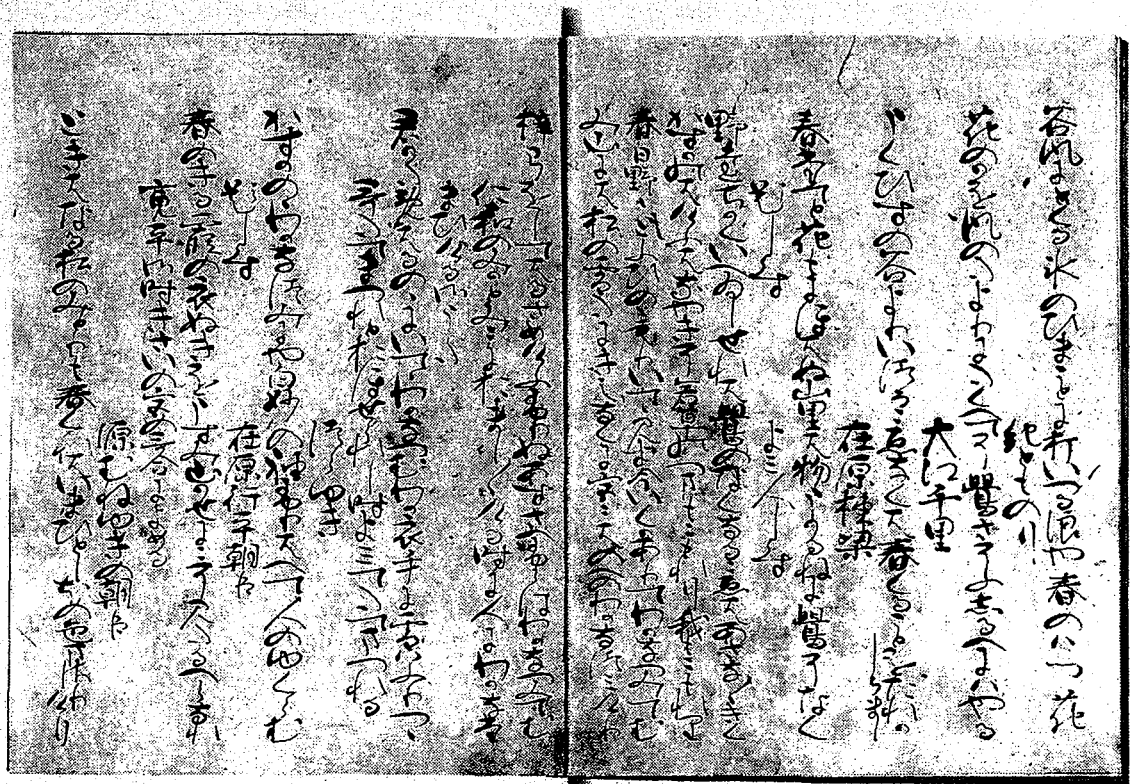
2 古今和歌集



3 古今和歌集



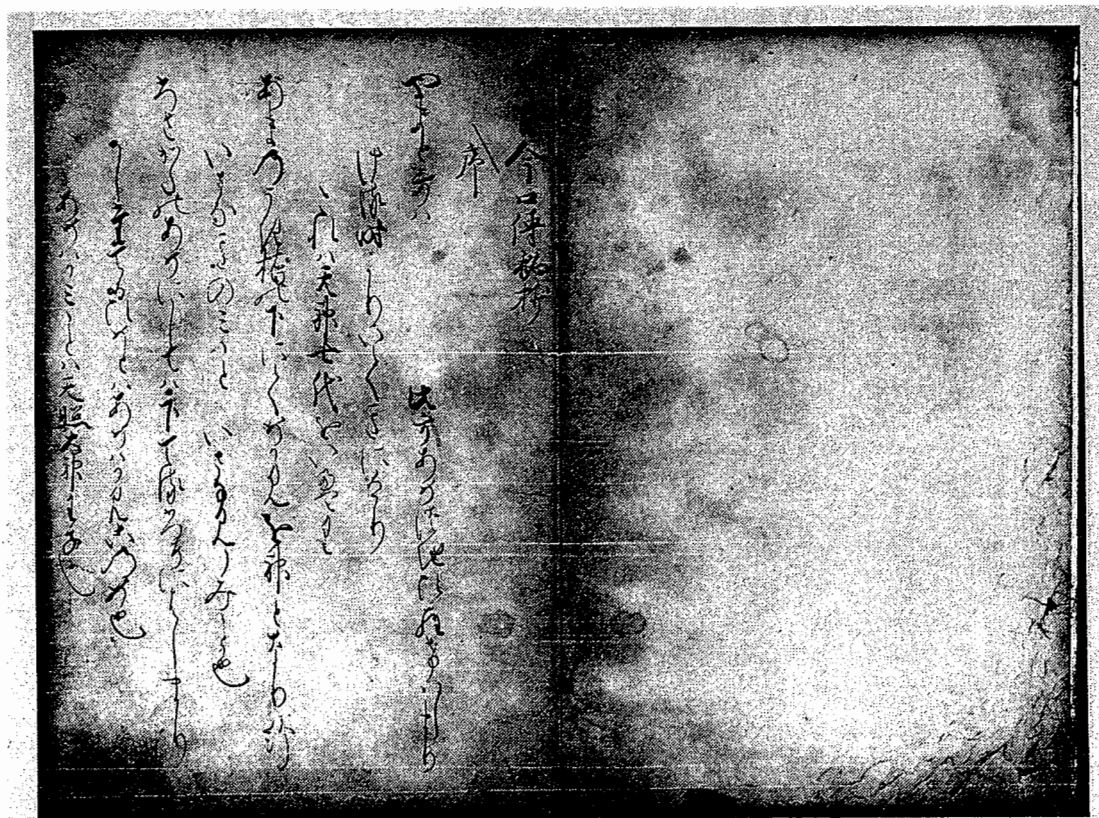
4 古今和歌集



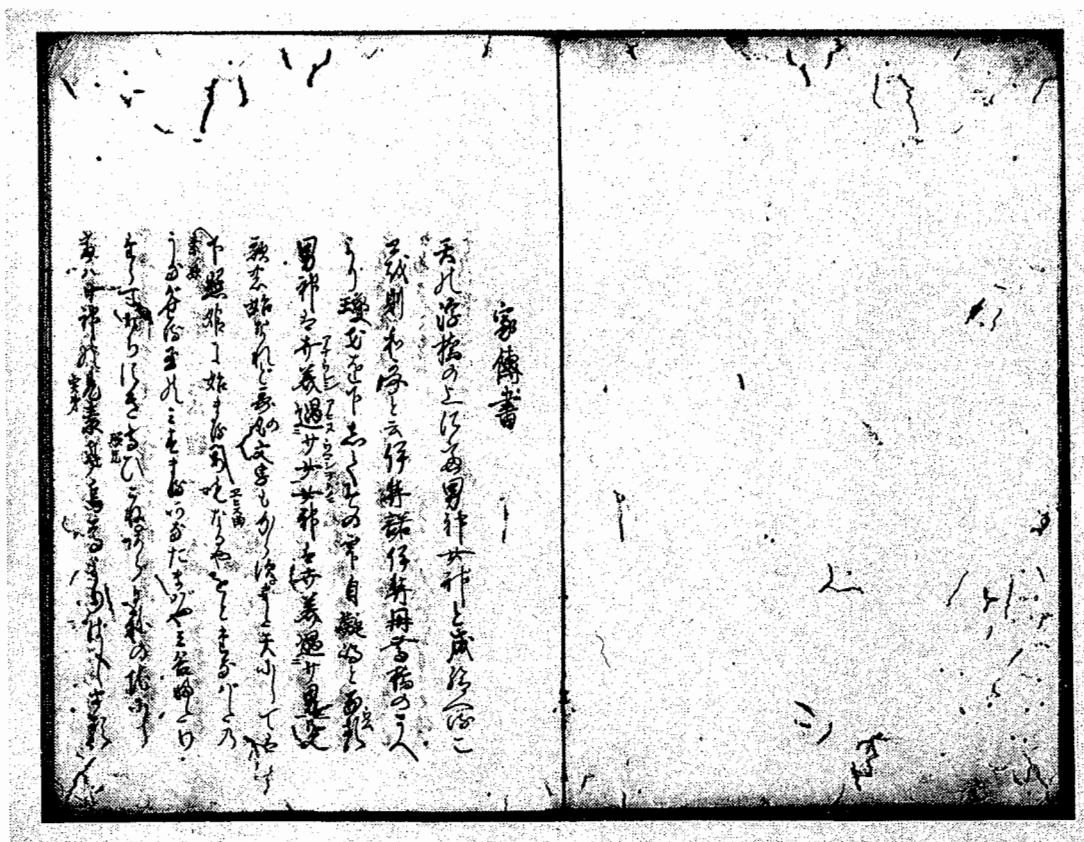
13 古今和歌集

[illegible]

己しき事と道會ふ様にて
 今いふ了る 一人志す
 自書より我れゆり書きてお前を物とせしめ
 大に中書とせし書
 海老もや讀めぬれどもと絶せぬとてく
 初年の中書多きお前と書し
 生置かへりてお前より書り目
 向ふ方といふに書し
 今より書せぬいふ
 月日の経
 己しき事と道會ふ様にて
 今いふ了る 一人志す
 大に中書とせし書
 海老もや讀めぬれどもと絶せぬとてく
 初年の中書多きお前と書し
 生置かへりてお前より書り目
 向ふ方といふに書し
 今より書せぬいふ
 月日の経



21 古今口傳秘抄



49 家 伝 書

は し が き

国文学研究資料館では、江戸時代以前の国文学を中心とする古典文献資料のマイクロ資料収集（フィルム撮影による複製収集）を続けるかたわら、可能な範囲内で古典籍原本（写本・版本）の収集にも努め、併せて利用に供します。

またそれらの古典籍原本の研究と普及を目的として、常設展示（年四回。期間約三ヶ月）と特別展示（年一回。期間約二週間）の開催も回を重ねてまいりました。

今回の特別展示は「古今集」であります。その中心は、故西下経一博士旧蔵初雁文庫本の中の古今集の伝本や注釈書など五十点であり、それに若干の初雁文庫外の館蔵書を加えました。本展示が研究の進展に寄与するところがあれば幸いです。

昭和六十一年十一月一日

国文学研究資料館長 小山弘志

凡 例

一、この目録は、国文学研究資料館第16回特別展示「古今集——初雁文庫本を中心として——」の展示資料解説目録である。

同展は、昭和六十一年十一月一日（土）より十五日（土）までの日曜祝日を除く十二日間、当館展示室において開催するものである。

一、解説は国文学研究資料館編『初雁文庫主要書目解説付初雁文庫目録』（昭和56・3、明治書院）より抄出した（解説文中、解題とあるのは本書を指す）。抄出に際し、文意を損わぬよう纔かに手を加えた。詳しくはそちらを御覧下さい。

目次

(図) は図版掲載を示す。

(一) 古今集の伝本

1	古今和歌集	1
2	古今和歌集	2
3	古今和歌集	2
4	古今和歌集	3
5	古今和歌集	4
6	古今和歌集	4
7	古今和歌集	6
8	古今和歌集	7
9	古今和歌集	7
10	古今和歌集	8
11	古今和歌集	9
12	古今和歌集	9
13	古今和歌集	10
14	古今和歌集	11

(二) 古今集の注釈書

15	古今集灌頂部秘歌百十六首注(「奥義抄」抄出)	12
16	古今秘注抄(顯註密勘)	13
17	古今集為家抄	13
18	古今和調集〔注〕	15
19	古今和哥集〔注〕	16
20	古今和調集注	17
21	古今口傳秘抄	18
22	古今和調集〔注〕	19
23	古今集童蒙抄	19
24	古今血脈抄	20
25	教端抄	21
26	古今通	22
27	古今和歌集聞書(三流抄)	23
28	古今序註	23

29	古今和歌集序註……………	24
30	古今和哥集序註……………	25
31	古今和哥集序聞書……………	26
32	〔古今序抄〕……………	26
(三) 古今伝授關係書		
33	古今和歌灌頂卷……………	27
34	古今和歌集灌頂口伝……………	28
35	和歌灌頂次第秘密抄……………	29
36	古今和歌集相伝抄深秘密勘……………	30
37	古今二字相伝……………	31
38	古今和歌集伝授切紙……………	32
39	切紙口伝条々(三鳥伝)……………	33
40	古今集秘訣(古今集口訣)……………	34
41	古今伝秘図……………	35
42	古今切紙廿三条……………	35
43	古今十卷之切紙……………	36
44	古今和歌集相伝之次第……………	37
45	八雲神詠和歌三神大極秘口訣……………	38

46	〔歌の秘書〕……………	39
47	古今廿帖之内甚秘口訣切紙伝受……………	
	(古今切紙伝)……………	39
48	超大極秘古今内伝受切紙口訣条々……………	
	(古今集内伝受)……………	40
49	家伝書……………	(四) 41
50	三鳥三木切紙伝・古今和哥集次序伝……………	42
51	古今和調集序・古今六鳥八柏之事……………	43
52	二条家古今集奥秘口伝……………	43
53	歌道筒守……………	44
54	古今和歌集伝之弁……………	45

(一) 古今集の伝本

1 古今和歌集

写 一冊 一二・一九

青竹色に菱形文様を織り出した絹表紙の左上に内曇り題簽を貼り、「古今和歌集」とある。内題（端作り）は「古今倭歌集序」とある。巻頭に真名序を置き、以下、仮名序、本文の順。二二・五×一五・五cm。袋綴。本文料紙は薄様鳥の子で、見返しは共紙。本文墨付一六九丁。一面一二行、和歌一首一行。「右古今和歌集師主権僧正盛彦大和上所持^{遺弟}深盛誌」の極札が挟み込まれている。江戸初中期写か。

比較的伝本の少ない貞応元年本の系統に属し、貞応元年十一月廿日の奥書の後に、延文元年十二月の法印大和尚位仲顯と寛永七年九月八日の足立氏孝興なる人物の奥書があり、その次に、

以右本行数文字賦仮名仕真名仮名書分再朱点等迄不改一字書写之、再三令校合畢

承応三年孟夏初七

沢田氏言崇^{後改言珍}（花押似書）

の奥書があり、さらに巻末に、

右定家卿自筆之本、稲葉丹後守殿所持之處、堀尾山城守殿母儀長松院殿有^テ所望可令^{（？）}所写之訖、其筆者山城守殿家臣足立七左衛門孝興為私竊写之令秘藏、孝興山城守殿家断絶之後酒井讃岐守忠勝為仕官、予亦因彼而令懇望之書写之畢

と記されている。

2 古今和歌集

写 一冊 一二・二〇

鳥の子に金粉を散らした表紙の左方に「古今和歌集 上」と記した題簽を貼るが、これは明かに後代のものである。内題（巻一端作り）は「古今和歌集巻第二」とある。二〇・一×一三・九cm。列帖装。本文料紙は鳥の子。本文墨付一四八丁。一面八行で、和歌一首一行。日朗写本の転写本。室町前期写。

貞応二年本の系統に属し、

正和元十月日

延山御師仍需書

日朗

の奥書があり、署名の下に「日朗」（子持杵付）と朱で印の形を描く。その後、遊紙一丁半を隔てて

水戸下町殊硯町

鈴木新左衛門珠蔵

元禄元酉年三月七日父新左衛門御家老様より拝領仕儀之者也

の識語が加えられている。真名序を欠く。

3 古今和歌集

写 一冊 九九・三

茶色地に大型の牡丹唐草の模様の入る金欄表紙の左方に「古今和歌集」と記す紙題簽を貼る。これは將軍義政の手

という。二六・七×一七・〇cm。列帖装。本文表紙は楮が少し混じる鳥の子。墨付一六〇丁。序は一面九行、一行一九字程、真名序は一面八行、本文一面一〇行、和歌一首一行。文明三年写。一丁表に「谷森藏書」の印記がある。奥書は「貞應二年七月廿二日……」のもの、儀同三司善成のもの等とつづき、そして「此集日邦之周詩也……中略……他時異日功成名遂而携此集而以還國則永作西周之鎮護也決矣文明三禊辛卯陽月下浣日 三井庵聖護院准三宮道興誌施」「重記依騷乱忿忙以三ヶ日暇書之之間後生之嘲寔恥有餘矣（花押）」と記されている。

大内政弘（明応四―一四九五―年没）のために山城の聖護院門跡道興（永享二―一四三〇―年―大永七―一五二七―年）――関白近衛房嗣（応永九―一四〇二―年―長享二―一四八八―年）の第三子――が応仁の乱の余燼が消えないこの年に、三日間で書写したものだという。本写本も『古今集の伝本の研究』五九頁の表中で紹介されており、「……略……大内政弘のために書写、義政題簽を書き、儀同三司（四辻）善成証明を加ふ」とある。少ないながら朱で声点が記されてもいる。

4 古今和歌集

写 一冊 一二・二三

本文共紙の表紙で、外題なし。内題（巻一端作り）は、「古今和歌集巻第二」とある。二三・三×一六・七cm。列帖装。本文料紙は鳥の子。見返し共紙。本文墨付五二丁。一面一〇行、歌・作者各一行、詞書二字下げ。箱入。

巻頭に仮名序、次いで本文二〇巻、末尾に墨滅歌一首と真名序とを記す。奥書は、貞應二年本のそれ（「伝于嫡孫可為将来之證本」まで）があり、次いで、

書写本云

累代好士平常縁所持之本也、外題所望之間染禿筆畢

和歌所旧老大僧都

書写本云
旅行之時為隨身以家本令書写之、詔門弟源基清助筆常縁少々書之、勘文并声以下所口伝書加畢、准証本者也

文明七年十二月廿一日

常縁

とある。また、「四辻殿（琴山印）」（裏白）という了佐の極札が添えられている。これにより、掲出本は、東常縁所持本を文明七年（一四七五）源基清が写した本の転写本であることが知られ、書写の時期は恐らく室町末期と思われる。本文は、春上の一八・一九番歌の順序が通常本の通りになっている貞応二年定家本で、全巻にわたって朱で声点を加えられている。

5 古今和歌集

写 二冊 一二・一二二

素紙の表紙左上に「古今集 卷一（巻二）」と打付書き。内題（巻一端作り）は「古今和歌集卷第一」とある。二・五×一六・〇cm。列帖装。本文料紙は鳥の子。見返しよりただちに仮名序が書かれている。本文墨付、上一一〇丁、下一一六丁。一面七行、和歌一首一行。仮名序前半に漢字・片仮名で朱の書入がある。各冊表紙中央に「武田／文庫」の朱方印がある。室町後期写、伝宗梅筆。上冊末尾に、「宗祇同宿宗梅（琴山印）」という古筆了佐の極札を貼付してある。貞応二年本だが、末尾に貞応二年の奥書があるだけで、伝来の経緯は未詳。

6 古今和歌集

写 一冊 一二・一五

紺地の金欄緞子に花唐草模様描の表紙の中央に草花の下絵題簽を貼り、「古今和歌集」とある。内題（巻一端作り）は、「古今和歌集卷第一」とある。二二・二×一五・三cm。列帖装。本文料紙は鳥の子。箱入。見返しは金泥、下方に金箔を置く。遊紙首二丁、本文墨付一六七丁。一面九行、歌・作者各一行、詞書二字下げ。

巻頭に仮名序、次いで本文二〇巻、末尾に墨滅歌一首と真名序とを記す。奥書は、貞応二年本のそれ（「伝于嫡孫可為将来之証本」まで）の後に、

元応元年九月九日為門葉相承令書寫訖

釈頓阿判

同十二月廿日校合畢

永正七年二月廿五日以右本不違一字書寫読合及数返者也

從三位左兵衛督源政知（花押）

此集以故匠作当家相伝歌本書寫校合了、尤可為證本者也

右衛門督藤為和（花押）

とある。他に、一オ（遊紙）に

勝幢院殿政知卿

古今集全部
東山殿御舎弟

（小林了可印）

の極札貼付、次いで、

本外題八宮良純御筆

政知

普光院義教公息義政公舎弟／右馬頭左兵衛督関東主君之始／香巖院主落世政知息左馬頭義／高慈照院義政公為猶

子而改／義澄法樹院殿

寛正二年関東下向延徳三年卒

と政知を考証した後人の識語がある。……中略……但し、この源政知が没したのは延徳三年（一四九二）であつて、

永正七年（一五一〇）に掲出本を書写する事はあり得ない。或いは別人かと思われる。なお為和は為広男、正二位権

大納言民部卿、天文十年（一五四一）駿河にて出家、法名静清、天文十八年（一五四九）七月十日没。六十四歳。良

純親王は、後陽成天皇第四皇子、寛文九年（一六六九）没。六十七歳。

本文は、春上の一八・一九番歌の順序が通常本と逆になっている点をはじめ、貞応二年定家本のうち頼阿本が持つ特徴をすべて備えており、誤写も殆んど見られない良質の伝本と言える。

因みに頼阿は、元応元年（一三一九）・観応二年（一三五二）・文和二年（一三五三）・延文三年（一三五八）・同四年（一三五九）に、二条家相伝の貞応二年七月二十二日本（いわゆる貞応本）を書写していることが知られる（詳しくは『古今集の伝本の研究』参照）。頼阿が死後偶像化・神聖視されるに従って、これらの古今集の書写本は、最も権威のある古今集の証本とされてきた。掲出本の如き転写本をも含めると、古今集頼阿本の現存本は十数本が知られている。

7 古今和歌集

写 二冊 一一・一六

獣・花紋様を織り出した布表紙で、外題は上冊にはなく、下冊のみ表紙左上に題簽を貼り、「古今和歌集下」とある。内題はなし。二三・八×一七・七cm。列帖装。本文料紙は鳥の子。見返しは金箔。本文墨付、上七六丁、下八二丁。一面一〇行で、和歌一首一行。江戸初期写。

貞応二年本の頼阿本の系統に属し、貞応二年の奥書の後に、

元応元年九月九日為門葉相令書写訖

同十二月廿日校合畢

観応二年十月三日書写畢

釈頼阿判

と二様の頼阿本の奥書があり、その後に、

西方行者頼阿

此集暇日以相伝本書写校合了、老眼不堪成字、後見有将不可出窓外而已

永正龍集乙亥閏二月中旬

槐陰逃虚子_{在判}

と、永正十二年の三条西実隆の奥書があり、実隆本の転写本ということになる。

8 古今和歌集

写 一冊 九九・四

葡萄茶地に金泥雲引き海贈模様の入る紙表紙の左方に「古今倭歌集」と記す金泥雲引き波模様の入る題簽を貼る。

二六・七×一七・〇cm。列帖装。料紙は鳥の子。墨付一五四丁。一面一〇行。和歌一首一行。江戸前期写か。奥書は貞応二年七月廿二日のものにつづいて「元応元年九月九日為門葉相承令書写訖 西方行者頓阿」と記されている。

また古筆の証文が付され、それに「古今和歌集全部一冊 頓阿法師真蹟無狐疑者也 應貴命證之 享保十三年仲夏中旬 古筆了延」とある。古筆のいう「應貴命」や書風からも頓阿の自筆とは認めがたく、紙質などからみても、かなり時代の下るもの、例えば、外題の筆者の時代に近いと判断される。それは、本写本を収める黒漆塗箱に金泥で「古今和歌集 頓阿法師筆 外題 持明院重相基時卿」と記されたもので、基時は元禄一七年（一七〇四）七〇歳で没している。

9 古今和歌集

写 二冊 一二・一七

朽葉色布目鳥の子の表紙の左上に、銀単色鳥の子の題簽を貼り、「古今和歌集_{（マ）}」「古今和歌集_下」とある。但し題簽は、下冊のを見ると元来は鳥の子紙の上に絹布を貼ってあったらしく、現在下冊の題簽の右半分のみ絹布が残っている。内題（巻一端作り）は「古今和歌集卷第一」とある。二四・三×一八・二cm。列帖装。本文料紙は鳥の子。見返し共紙。紙数は、上冊、遊紙、首一丁、尾二丁、本文墨付七五丁。下冊、遊紙、首二丁、尾四丁、本文墨付八四丁。

一面二〇行、歌・作者各一行、詞書二字下げ。

掲出本は、巻頭に仮名序、次いで本文二〇巻、末尾に墨滅歌一首と真名序を記す。奥書は、貞応本の奥書（但し、「貞応二年七月廿二日^{発亥} 戸部尚書藤判」の字句を欠く）に次いで、

延徳元年十月晦日

蓮花寺向坊良覚

如證本無相違令写之者也

慶安四年卯五月十八日

盛雅

とある。良覚・盛雅については未詳であるが、慶安四年（一六五二）の書写本であることが知られる。本文は、春上の一八・一九番歌の順序が通常本と逆になっている点をはじめ、貞応二年定家本のうちの頓阿本の特徴を備えている。但し、本文や作者についての注記は、掲出本ではすべて欠いている。

10 古今和歌集

写 一冊 一二・一八

黒色洋紙の表紙（後補）で外題なく、内題（巻一端作り）は「古今和歌集巻第一」とある。二三・五×一八・〇cm。列帖装。本文料紙は楮紙。見返しも後補。本文墨付一五〇丁。一面八行、和歌一首一行。江戸初期写。

貞応二年本に属し、貞応二年の奥書の後に、

^{本云}

文明十四年四月十八日依釈宗祇懇望染筆毫者也

権中納言判

と記されている。巻末に、

上下巻墨付百五拾丁

とある。宗祇の懇望により文明十四年に書写された本の転写本であることが知られる。権中納言を西下博士（『古今集の伝本の研究』五九頁）は三条西実隆と推定された。

11 古今和歌集

写 一冊 一二・二二

樺色無地布目紙表紙中央に「古今倭歌集 全」と打付書き。内題は、扉中央に「古今倭歌集」とある。横本で、二・五×一九・五cm。袋綴。本文料紙は楮紙で、見返しも共紙。本文墨付七一丁。一面二二行、和歌一首一行。安政五年、江南義曠写。奥に朱で、

右古今集廿卷者、堯恵以兼空上人真蹟之本所被附清濁旁訓也、或人就古本不違一字書写、為家藏之秘本再懇款講而騰写校正之、永以為家秘周記歲月云爾

元禄十四年巳季秋日

如菴成章識

と元禄十四年如菴成章（松岡玄達）の奥書があり、その裏面に同じく朱で、

安政五年戊午春日江南義曠書之

と記して、書写者の印とおぼしきもの六個を捺す。更にその後、「昭和七年十二月十一日購入」と西下博士の識語がある。貞応二年の奥書はないが、やはり貞応二年本の系統か。声点・注釈などの書入れが多く、特色ある内容呈している。

12 古今和歌集（卷十七以下）

写 一冊 一二・二六

青無地楮厚紙の表紙で、外題なし。内題（卷十七端作り）は、「古今和歌集卷第十七」とある。二四・一×一六・

一cm。袋綴。本文料紙は楮紙。本文墨付五一丁。一面一〇行、歌二行作者一行、詞書一字下げ。江戸中期写か。内容は、卷十七から卷二十までの定家本に「古今榮雅抄」その他の注を書入れた零本。卷末に真名序はない。

奥書は、

豆海役従

綱明（花押）

とある。但し、綱明については未詳。真名序を欠くことや本文の特徴から、嘉禄本と思われる。

13 古今和歌集

写 二冊 九九・二

金茶地に鳳凰・花の模様の入る緞子表紙の左方に「古今倭歌集上（下）」と記す紺墨流しの紙題簽を貼る。二九・五×一九・三cm。列帖装。料紙は中打ちがあるが、斐楮混漉き。墨付上冊六〇丁、下冊六五丁。序は一面一二行、二三行、本文一面一二行、和歌一首一行。永正一六年、宗清写。「青谿書屋」「月明荘」の印記がある。奥書に「右集依前内府実望公懇望以家相傳京極中納言定家卿自筆本不改一字愚息為和卿書写之尤可為証本者也 于時永正十六天初夏上澣日 桑門宗清（花押）」と記されている。

上冷泉為和（文明一八——一四八六——天文一八——一五四九——年）が正親町三条実望（享禄三——一五三〇——年薨）の求めに応じ書写した由の法名を宗清という父為廣（宝徳二——一四五〇——年——大永六——一五二六——年）の奥書である。なお、二世畠山牛庵の添状一通と古筆の極札二枚が付されている。本写本は、定家、嘉禄二年四月九日書写本（嘉禄本）の系統の本文であり、「冷泉為和自筆本二冊、弘文荘の書目第三號（昭和九年六月）に紹介されている。定家、為家の奥書の次に……前記の奥書、省略……為和の父は為廣である。」と西下経一博士の『古今集の伝本の研究』六八頁に記されたものである。

14 古今和歌集

写 二冊 一一・二七

紺無地厚紙の表紙の左上に題簽を貼って「古今和歌集上(下)」とあり、内題(巻一端作り)は、「古今和歌集巻第一」とある。二七・四×一九・二cm。袋綴。本文料紙は楮紙。遊紙各冊首二丁尾一丁、本文墨付、上六七丁、下七七丁。一面一〇行、歌・作者各一行、詞書三字下げ。江戸中期写。

巻頭に仮名序、次いで本文二〇巻、末尾に墨滅歌一首を記す。次いで嘉禄二年四月九日の嘉禄本の奥書(「于時頼齡六十五寧堪右筆哉」まで)を記し、その後に真名序を付記する。本文については、西下博士が末尾遊紙に、

此の本嘉禄本なることは奥書にても本文の異同によりても知らる真名序は後人の加筆なること墨色ことなるによりておしはからる仮名序にて古注と称するものを省き公任注とおほしき六歌仙のうたのみはあるは如何古注なるをしりてさかしらにかゝさりしものか此の本私意を加へたとおほしき所二三見ゆ必ずしも清輔本の如く原本に古注なかりしにあらざるべし原本は伝来正しき写本と見ゆれと朱点を省き濁点を入れたり書物の形式は足利末又は徳川始なるべし

昭和四年十二月八日

西下経一

と記しておられるところに尽きる。

(二) 古今集の注釈書

15 古今集灌頂部秘歌百十六首注（「奥義抄」抄出）

写 一冊 一二・七六

古今集注釈書。藁色花丸押文の厚紙の表紙の左上に題簽を貼り、「古今集灌頂部百十六首注」とある。内題（端作）は「古今集灌頂部秘調百十六首注」とある。二三・五×一七・五cm。列帖装。本文料紙は鳥の子。遊紙は首一丁、本文墨付五四丁。一面一〇行。奥書・識語の類はない。江戸後期写。

さて、本書は、目録に、

春上部 九首

袖ひつ

雪のうち

おりければ

とふひ

春やとき

松のゆき

たつき

在とやこゝに 鶯のかさ

のように、問題になる語とそれを含む和歌合計一一六首を注しているのであるが、この一一六首は実は清輔の「奥義抄」下巻の古今歌一一六首の注そのものなので、内容の紹介は省略しておく。なお、内閣文庫の「古今和歌灌頂部津守國夏作」（二〇〇・五一）は掲出本と同じものであり、このような形で「奥義抄」の一部が流布していたことを、ここでも確かめ得るのである。

16 古今秘注抄（顕註密勘）

写 三冊 一二・八一

古今集注釈書。藍地に松草花の金泥模様の表紙左上に題簽を貼り、「古今和歌集抄上（中・下）」とある。内題（端作り）は「古今秘注抄第一 春上」とある。下巻のみ後表紙を欠く。二三・〇×一六・五cm。列帖装。本文料紙は鳥の子。遊紙は、上冊首一丁尾三丁、中・下冊首一丁尾二丁。本文墨付、上六五丁、中九一丁、下六〇丁。一面一行。一首一行、注は三〜四字下げ。ままた朱の合点等を有する。奥書あり（後掲）。江戸初中期写。

上中下各冊に、卷一〜卷十、卷十一〜卷十六、卷十七〜卷二十を収める。内容は流布本「古今和歌集抄」（顕註密勘）と際立って異なる点はないが、卷十六末尾に「雖不載此注書加之」として約一丁半にわたる補遺が見られる。しかしこれも、本書の伝本においては比較的多く見られるもので、その内容は「古今秘注抄」（顕註密勘）（一二・八四）と大差ない。

一方、奥書も流布本と類似したものであるが、上巻末尾に次のような奥書が存する。

本奥書 延文二年八月十四日借請右京権大夫長信入道（三字分空白） 法名道 本書写終畢、一本雖所持之不審事依多之書写之者

也、此本故兼材筆也、可憐くく不便くく

法印仲顕 在判

具校合畢

梶井宮以御本之書写之、于時応永十三年正月卅日更に不可有外見

右奥書中の法印仲顕は、源邦長子で、新千載集・新拾遺集に各一首入集した勅撰歌人である。……下略……

17 古今集為家抄

写 五冊 一二・八六

古今集注釈書。紺色厚紙に亀甲浮文を押した表紙の左上方に素紙の題簽を貼り「古今集牡丹花抄一（二〜五）」と書

き、「牡丹花抄」の部分を朱で消して、その左側に朱で「為家抄」と記す。二七・一×一九・三cm。袋綴。本文料紙は楮紙。墨付、第一冊二九丁、第二冊四九丁、第三冊三二丁、第四冊六一丁、第五冊六三丁。原則として一面一二行。江戸初期写か。

第一冊最終丁に「弘長三年八月四日自中務親王家被召之仍進覽^{云々}但私本文を以少々勘入之^{云々}」という識語があるが、最終の第五冊末尾の奥書はない（他本にある墨滅歌もない）。

さて、この種の「為家抄」の伝本は必ずしも少なくないが、大阪府立図書館本・宮内庁書陵部本（二一〇・七〇七）・宮内庁書陵部蔵鷹司家旧蔵一本（鷹・三八七）・同別一本（鷹・四一七）などは、古今集の卷一（春上）から卷十四（恋四）までの間、全く別の注釈を混入している。それに対して、天理図書館現蔵の大島雅太郎氏旧蔵本と東洋文庫本とは右の他注混入が見られないのであるが、掲出本もこの混入のない系統に属する点、貴重である。

ところで、この「為家抄」は、言われるごとく為家の著作であろうか。前掲の弘長三年に宗尊親王に進呈したという識語は確かに為家のものにふさわしいが、内容を検すると、随所に為家の著作にあらざる徴証が見出せるのである。例えば、第一冊第十六丁表に「又云、ふしのけふりの事、宗匠家には不断之義あり……」、第二冊第一二丁表に「但、宗匠家云、あしひきにさまくの義あるか……」などのごとく「宗匠家」という語が随所に用いられているが、これは二条流・二条派の人達が為世などの二条家嫡流について言う場合が一般的であり、特に前者の「富士の煙、不断」の説は、二条家の説としてはあまりにも有名であるが、為家の真作「為家古今序抄」の説とは異なっている。要するに、本書は、おそらくは為世の時代以降に、二条家流の歌人が弘長三年の為家の注釈を針小棒大に膨張させることによって成立させたものと考えられるのである。

なお、片桐洋一『中世古今集注釈書解題一』に詳しい論がある。

18 古今和調集〔注〕

写 一冊 一二・二〇九

古今集注釈書。縹色厚手紙表紙の左上に題簽を貼り、「古今和歌集」とある。内題はない。二八・〇×二〇・五cm。袋綴。本文料紙は楮紙。墨付七七丁。一面一一行。江戸中期写。

内容は先ず、

古今第一

キサイノ宮ノ哥合 松浦姫 武蔵塚 女若草

トフ火ノ野守 仁和帝事 ヨフコ鳥

昭琳太子 都花落事

第二 月ト花トノ勝劣 心ノサワカシキ事

(字高ママ)
夢中散花事 風水ノ便見花 三月尽

などのように目録が置かれているが、これは本注釈のすべての目録ではなく、いわば重要事項の目録である。……中略……目録に取り上げられているのはすべてではないし、注釈をしているのも古今集の和歌のすべてではない。またその注釈態度は事実としてはあり得ないことを、あつたこととして述べる、鎌倉・南北朝期の注釈に多い態度であるが、事実、本書には、

本云、弘安十年_{丁亥}七月十二日読之

とある。

なお、巻末には、

于時寛永第十五_{丁亥}年九月三日

とあり、続いて、

慶安五年^{壬辰}九月廿一日写之畢

右之本急写申候故、文字之誤落字以下数多可有之候間、御吟味可被成候とある。

なお、片桐洋一『中世古今集注釈書解題二』に解題と翻刻がある。

19 古今和哥集〔注〕（卷十八―二十）

写 一冊 一二・三〇

古今集注釈書。零本か。青無地紙表紙で、外題なし。内題（端作り）は「古今和哥集卷第十八」とある。二〇・五×一四・五cm。袋綴だが原態は列帖装か。本文料紙は鳥の子。見返しは共紙。本文墨付三一丁。一面一一行。中原家旧蔵。室町後期写、三条西実隆筆か。包紙に「三条逍遥院 実隆卿筆^{古今一冊}」とある

現存の形は卷十八より卷二十までで、しかも脱落の部分がある。原型はもっと大部で、古今集全般に及ぶものであったか。もっとも卷十八は紙の最初から始まっているが、卷十九・卷二十は前巻に続けて紙の途中から書かれているので、この三巻だけであったとも考えられる。三巻のほとんど全部の歌について注釈が施されているが、九七二・一〇〇二、一〇〇三、一〇〇四の四首は省略されている。脱落は三箇所、九四四の途中から九五一の途中まで、一〇四八の途中から一〇五四の途中まで、一〇八二の途中から一〇九七の途中まで。前の二つは各一枚分、後の一つは二枚分。

本文の最初の部分を抄出しておく。

雑哥下

題不知

読入しらす

世間はなにかつねなる飛鳥河昨日の淵そけふはせになる

忠仁公ノ哥也、世ナカノ哀ヲ思テ読ル、アスカ河内ニアリ

幾代しもあらし我身をなそもかくあまのかるもに思ひ乱る、

ナソモカクハイカン如^レ此也、比ハ冬次ノ許ニテ位ヲ、ロシ奉リケレハ世ヲ恨テ平城天皇ノ御哥也、御違例アリテ治世五年ト申ス

雁のくるみねの朝霧晴すのみ思ひつきせぬ世の中のうさ

雁ノクル峯ハ越後ノ山也、是ハ仁明天皇ノ崩御ノ後ニ順子^{チライ}ノ御哥也、クルミヲヨメリト云也

この内容を見ると、現存の諸注では佐賀県立図書館の「古今和歌集聞書」や宮内庁書陵部の「古今抄」(鷹・四〇七)などが最も近い関係にあると分る。……下略……

20 古今和調集注(巻四・五・六)

写 一冊 一二・一七二

古今集注釈書。褐色楮紙の表紙の左上に題簽を貼り、「古今和歌集注^{第四五六合冊}」とある。内題(端作り)は「古今和調集巻第四注」のごとく記す。一四・〇×二〇・四cm。袋綴。本文料紙は楮紙。遊紙尾二丁、本文墨付七〇丁(各丁表の左上隅に朱筆で丁付を記す)。一面一二行。江戸初期写。

掲出本は、他に同内容の伝本のあることを知らず、編著者も成立年代も不明であるが、室町後期の成立と見てよいのではあるまいか。……中略……宮内庁書陵部所蔵の「古今秘註」(三五〇・八一)などが僅かに似ているところもあるが、「昨日こそ」の歌の注の後半「一義云、……」以下などは全く他に類例を知らない。きわめて特異な注釈である。しかし、この注釈の特異性はこの程度のものではない。かつて片桐が論じたことがあるように(「古今集における和歌の享受」、『文学』昭和五〇・八)、秋上・一七五番の「題しらず よみ人しらず」の「天の川紅葉を橋に

わたせばやたなばたつめの秋をしも待つ」について室町時代物語の「天稚彦物語」（「たなばた」と題する伝本もある）の一篇をほとんどそのままに引用して注しており、もう一つ例をあげれば、同じく秋上の一九四番「久方の月の桂も秋はなほ紅葉すればやてりまさるらむ」の注には、「今昔物語集」（巻第五、三獸行菩薩道、兔焼身語第十三）の類話を長々と記している。これらの例は、この注釈が既成の物語について大いに語る体のものであることを如実に示していると言つてよからう。

21 古今口傳秘抄

写 一冊 一二・一六一

古今集注釈書。紺地に金泥で庭前梅花を描いた鳥の子の表紙（見返しは金地菊花文、いずれも後の改装）の左上に題簽を貼り、「古今口傳秘抄」とある。内題（端作り）も同じ。二四・七×一六・二cm。列帖装。本文料紙は鳥の子。遊紙は首尾各一丁。本文墨付二九丁。一面一〇行。箱の蓋に「古今口傳秘抄 栄仁親王筆 壹冊」とあるが、栄仁親王ならずとも、南北朝期ないし室町初期の書写と見てよからう。……中略……それにしても、恋一の注が始まる前に「古今下帖」とあるのはどうしたことか。一口に言えば、上下二冊の「古今和歌集」写本に付せられた口伝秘注の別冊ノートであったとするのが妥当なのではないかと思うのである。

さて、掲出本に一致する注釈、あるいは明らかに同系と断すべき注釈書を他に知らない。例えば仮名序の注において、

ならの御時よりそひろまりにける

奈良の御かと、は、文武天皇を申也、おほく平城ヲ申はひか事也

とあって「奈良のみかど」を文武天皇としたり、「難波津に咲くやこの花」を梅としたりしているように、二条家流の注釈であることは確かだが、

さきくさとは おけらをいへり、つらゆきか口伝にいわく、三月よりは此草三葉四葉におひ、つる也、三枝まつりといふは、つき草のまつりとよめり、^{三月事也}或説にひの木と申、これは三葉四はにやあるへきと、ふしん也、これは世をほめて神につくる也

は親房の「古今序注」に引かれている一説に近く、「十吟抄」に最も近い。しかし、だからと言ってすべてが「十吟抄」に近いわけではない。全く一致せぬ部分もまた多いのである。

22 古今和謡集〔注〕

写 一冊 サ二・二〇

古今集注釈書。薄茶地に打曇り表紙。二三・九×一八・一cm。袋綴。料紙は楮紙。見返し本文共紙。墨付八四丁。一面一〇行、和歌一首一行。室町末期写か。

外題、内題ともになく、冒頭（1ウ）に「古今和謡集卷第十六」とあるが、卷末（84ウ）に、「此集談議事去寶徳二天秋依花頂殿様之／御競望冷泉持為殿舌所也仍而其序／北野法浄院之明献同聴^{（墨減）}。自明献文明九年 春愚老 宗雅傳之訖／文明九年／三月日」の奥書（本奥書）を持つところから、古今集注釈書の一つ「冷泉持為注」と知られる。卷十六哀傷から始まるので、本来四冊本もしくは五冊本としてまとまっていたもののうちの、最終冊にあたる端本である。

23 古今集童蒙抄

写 一冊 一二・一〇一

古今集注釈書。鼠色鳥の子の表紙の左上に題簽を貼り、「古今童蒙抄」とある趣だが、「童蒙」の部分は剝落して定かではない。内題（本文端作り）は「古今集童蒙抄」とある。二四・六×一七・二cm。列帖装。本文料紙は鳥の子。なお、後表紙は失われている。遊紙は首尾ともに一丁。本文墨付五一丁。一面一〇行。江戸初期写。

さて、本書の著者はいうまでもなく一条兼良であるが、第五〇丁表に諸本に見える「文明八年六月中旬書写之訖

桃華老拙在判」という兼良の識語があり、続いて五二丁表に「此一冊老華先生兼良公以御自筆不違一字書写校合訖、尤可為正本者也 元知」とあるが、元知なる人物については不詳と言わざるを得ない。

掲出本を群書類従本と比較すると、類従本の持つ卷十九の錯簡は本書にはなく、「雑躰歌」「短歌」「詠人不知の長歌」「貫之なが歌」とあって、「春霞思みだれ……」という類従本冒頭へつながる正しい形になっているほかは、類従本と非常に近い本文を持っている。類従本系の善本と言ってよからう。……中略……同じ兼良の「伊勢物語愚見抄」が鎌倉時代の「知頭集」などを妄誕の書と断じて排斥する姿勢の中から生まれたのと同じく、鎌倉時代の超現実的な秘伝の世界から、いわば穩健な、合理的な世界に古今集を戻そうという姿勢で書かれている。ためにその注釈内容は穩健と言えは穩健だが、特に特色がないという結果に終わっているというわけである。

24 古今血脈抄

写 八冊 一一・一〇五

古今集の注釈書。薄朽葉色鳥の子無地の表紙の左上に縹地金切箔散らし秋草描の題簽を貼り、「古今血脈抄一（終）」とある。見返しは金箔吹き散らし、内題（各冊端作り）は第二冊のみ「古今和歌集聞書卷第二」とするが、他は「古今和歌集序」「古今和歌集卷第四」等とのみある。二八・〇×二〇・四cm。袋綴。本文料紙は薄手の楮紙。墨付は第一冊（仮名序）四九丁、第二冊（春上・夏）六六丁、第三冊（秋上・冬）四七丁、第四冊（賀・物名）二五丁、第五冊（恋一・恋三）五九丁、第六冊（恋四・恋五）六一丁、第七冊（雑上・雑下）五二丁、第八冊（雑体・墨減歌・真名序等）六三丁。一面一行（注の部分）。第八冊の末尾、堯恵による「延五記」の奥書の後に、

此集三条西殿駿州御在国之内令伝受之書写之者也

永禄十年丁卯初冬日 孝甫

という奥書があり、宗祇の「両度聞書」と堯恵の「延五記」を集成した三条西家流の注であるが、掲出本と同じ奥書

は、同内容の刈谷市立図書館本・西尾市立図書館岩瀬文庫本（「古今和歌集血脈」）などにも見られる。

25 教端抄

写 九冊 一二・一一一

古今集注釈書。青色無地の表紙左上に題簽を貼り、「教端抄 一巻」とある。おそらくこれが原装であろう。内題（端作り）は「古今和歌集巻第一」とある。二七・四×一九・二cm。袋綴。本文料紙は楮紙。本文墨付、第一冊八三丁、第二冊六八丁、第三冊八五丁、第四冊七三丁、第五冊九四丁、第六冊九二丁、第七冊八八丁、第八冊九六丁、第九冊一一丁。一面九行、一首一行。頭注と行間に墨および朱の書入がある。江戸中期写。

さて、「教端抄」は北村季吟の著作であるが、どういうわけか伝本はきわめて少なく、掲出本のほかには、後述する日本大学図書館本以外に存するを知らない。

さて、掲出本第九冊の仮名序注の末尾に、

元禄十二年十二月十二日書于向南亭雪窓下

法眼季吟 七十六歳

同年同月廿一日一校合畢

十八日加磨
再昌院法印季吟
(印似書)

とあって、元禄十二年の成立であることが知られるが、日大図書館本では、

元禄十五年^{壬午}正月上元日終書写之功、今日故湖春忌日也

再昌院法印季吟 七十九歳
朱印有

とあって、掲出本よりも三年後の成立であることが知られるのである。

季吟の古今集注釈としては、初雁文庫にもその後半を存する貞享三年二月五日成立の「古今序抄」（一二・一一〇）
Ⅱ 解題46、高松市の松平公益会に季吟自筆本が伝存）があるが、いずれも同趣同傾向の諸注集成的注釈である。「八

代集抄」の「古今集抄」がおおむね「榮雅抄」の祖述に終わっているのに対して、これらは季吟の古今集注釈研究の跡をそのままに伝えるものとして、尊重すべきものと言つてよからう。……中略……なお、掲出本は片桐洋一の解説と索引を付して新典社から五冊本として影印刊行された。

26 古今通

写 四冊 一二・一二一

古今集注釈書。水色紙表紙の右上に題簽を貼り、「古今通 一二（第二冊は三四、三冊は五六、四冊は七八）」とある。二六・七×一九・五cm。袋綴（改装）。本文料紙は楮紙。本文墨付、第一冊七六丁、第二冊七八丁、第三冊八四丁、第四冊一〇〇丁。一面一二行。江戸後期写。自序に次いで、

附言

此篇は五井蘭洲先生の哥あまりになれるなり、先生常に万葉・勢語・古今集を好みて、よくよめり（以下略）
天明きのとみのとし季の冬

加藤景範

という跋文があり、注目される。

内容は五井純禎（蘭洲）の古今集の講義録で、景範が削るべき箇所は削り、補うべき部分は補なって、八冊の注釈書としたもの。右に見るように天明五年の成立。国会図書館・静嘉堂文庫をはじめ数箇所には伝本があり、自筆本は現在大東急記念文庫に蔵されている。掲出本は、改装の際、外題で明らかな如く二冊ずつをまとめて四冊本としたもの。

五井純禎は大阪出身の朱子学者で、懷徳堂の教授をつとめた。宝暦十二年六十六歳で没。「万葉集詁」「勢語通」「源語詁」など国文学関係の業績も多い。加藤景範は、北村季吟系の国学者で、有賀長伯門下、竹里と号し、「和歌虚詞考」二冊などの著述がある。京都の人。寛政八年歿。享年七十七。

27 古今和歌集聞書（三流抄）

写 一冊 一一・一四四

古今集序の注釈書。能基の著と言われる「古今和歌集序聞書」、いわゆる「三流抄」である。鼠色布目紙表紙で外題なく、内題（端作り）は墨付第一丁に「古今和歌集真名序聞書」、第二丁に「古今和歌集聞書」とあり、さらに下巻に当る第三〇丁表に「古今和歌集序見聞」とある。二七・九×二〇・二cm。袋綴。本文料紙は楮紙。一面九行。墨付七二丁。江戸初中期写。すなわち最終丁表に

古今相伝家^{（仰カ）}□之外都叫乱々口々不可披露之宝^{云々}、於哥道者深秘至極也、若卒尔有輕然之義須蒙冥罰名者也、相承之輩一期之間守器用云々

永享十一年^{〔未〕}林鐘吉日任本書写畢、相伝橘 重清

于時主計允也

永享十一ヨリ明暦三丁^酉マテ九式百十九年歟

とあるが、書写は明暦より更に後であろう。伝本の多いこの注釈のうち、これと同系統の本は、大阪府立図書館本が知られている。

なお、片桐洋一『中世古今集注釈書解題二』参照。

28 古今序註

写 二冊 一一・九三

古今集序の注釈書。常陸の国の僧了譽聖罔の著。銀地唐菱花文の紙表紙の中央に題簽を貼り、「古今序註上（下）」とある。内題は扉の左上に「古今序註上（下）」とし、更に全体を二〇巻に分けて、それぞれ「古今序註巻第九」のごとく端作りする。本来は一〇巻に分かれていたのであろう。二四・〇×一七・二cm。袋綴。本文料紙は楮紙。上七九丁、下六三丁。遊紙なし。原則として一面九行、漢字をかなり多く交えた片仮名で記す。江戸中期写。下冊第五七丁

裏に

抑古今序者和歌肝心也、是故四条重相粗以註之、其後相公禪門并清輔朝臣等又註之焉、然而皆以省略、猶殘疑殆賢才尚尔、浅慮豈及、但今此序註多在神書深奥、然古來註者引文広多得義幽微也、所以削其枝葉而取其花実、以匡曉之處耳、此乃雖非我之当道、依或人所望難背、纔々載管見之所勘、懋備自他之廢忘、只是於懇志不憚後嘲者也、雖非是秘藏莫屢及外見、于時応永丙戌仲秋上旬候、了譽誌之

とあり、続いて、

本云、

於常州菰連浄土談所常福寺以テ今此序註作者了譽上人之御自筆之本一撰書之畢

右筆大和国葛城郡住人玉午慶居
了譽在判

恋しさは日数夜かすにまされともなとうき人のとをさかりけん

とあつて、更に「六花集註」の秋部後半の註のみを記して終る。

29 古今和歌集序註

写 一冊 一二・七九

古今集序の注釈書。金茶色無地鳥の子の表紙の左上に題簽を貼り、「古今和歌集序註 完」（西下博士の筆か）とある。但し、表紙・見返し（素紙）・遊紙（首に半丁余のみ）は、紙質等から見て後補。二四・〇×一六・五cm。本文料紙は楮紙。墨付六九丁。一面九行。袋綴。江戸後期写。

内容は、顯昭の古今集序註である。但しあるいは墨付第一丁の表が切り取られて無くなっている故か、冒頭の「ヤマトウタハ……イヒイタセルナリ」の仮名序の本文がなく、真名序本文の冒頭「夫和歌者託其根於心地……可以發憤」から始まり、一字下げて「今注云、ヤマト者斯国之惣名……」と顯昭の注がある。以下同形式（但し第二段以下

は、仮名序の本文は存し、片仮名で記されている。奥書は類従本と全く同じで、「寿永二年極月中旬顯昭注」（成立年次を示すもの）から始まり、文治二年正月廿四日・建久二年九月五日の顯昭の加點の奥書、弘安五年正月廿七日雅有の校合奥書、左のト部兼右の本奥書に至る。

此本以帰雲院住僧正堅藏主之本書之、傳僧土岐東息也、仍一流之本令相統之条、廻調法馳箭訖、最可謂証本矣

天文七歲四月十四日拾遺^{遺カ(朱)}ト部（花押似書）

30 古今和哥集序註

写 一冊 一二・一〇〇

古今集序の注釈書。常縁の講釈を宗祇が聞書したもの。薄朽葉色鳥の子の表紙左上に題簽を貼り、「古今和哥集序註 全」とある。内題はない。二四・〇×一六・五cm。袋綴。本文料紙は楮紙。遊紙首一丁、本文墨付三七丁、一面九行だが、例えば、

そのはしめをおもへはかゝるへく

哥をたてまつらしめ給ふ

というように周知の仮名序本文を大幅に省略したりして、粗雑な書写態度である。他人に見せる本ではなく、自身のためのノートであろう。江戸後期写。最終丁表（後表紙内側に見返しのごとく貼付けてある）には、

読進候趣無相違

常縁判

此一冊宗祇法師聞書之一卷写也、尤可為証本者也

と記されているが、これは、例えば宮内庁書陵部蔵智仁親王筆「古今集聞書」（五〇三・七一）三冊の仮名序注の末尾に存する識語と同じである。同本は宗祇が「兩度聞書」の内容について明応六年十一月二十三日から明応七年二月にかけて近衛尚通に講じたものであることが奥書によって知られるが、掲出本はその仮名序注のみが独立したもので

ある。……下略……

31 古今和哥集序聞書

写 一冊 一二・九八

古今集序の注釈書。肖柏が宗祇説を聞書した「古今和歌集古聞」の第六卷仮名序の部分のみを独立させたもの。萌黄色地金唐草花文織緞子の包表紙で外題はなく、内題（端作り）は「古今和哥集序聞書」とある。見返しは鳥の子に銀で鳥と雲を刷る。二四・一×一八・〇cm。本文料紙は鳥の子。遊紙は首一丁、尾五丁。墨付六一丁。一面八行。江戸初期写。最終丁表に

此一部聞書以老師夢庵本令書写者也、今依養松懇望付与之畢、聊不可有漏脱之儀而已

天文五年六月十七日

宗訊判

とあり、末尾遊紙裏に朱で、

經一曰奥書によりて古今和歌集古聞の序註（第六卷）と推定せらる

昭和十年十一月廿五日

と、西下博士の識語がある。

32 「古今序抄」（零本）

写 一冊 一二・一一〇

古今集序の注釈書。零本。前半部欠落して、外題内題共にない。一七・八×一二・九cm。袋綴。本文料紙は楮紙。本文墨付七八丁。一面一〇行。江戸中期写。

内容は、第一丁、

故人も此註をけつらす、定家卿の貞応・嘉祿の証本にも其儘かきつらねて子孫に伝へ給へるに、貫之の本意もとより和歌に六義有、からのうたにもあるへしといへるは、毛詩正義等にもか、はらぬといふことをしらさる人々

あるは貫之の自註といひ侍るは心よき、たとへうたを貫之此時見出されざる故なといふ儀をつけられしにやとそと始まるが、これは明らかに途中であつて、上下二冊本の上巻を散佚してしまつた零本というほかはない。冒頭に「七十一」と丁付するのも、そのことを示している（末尾の丁付は「百四十九」）。

さて、巻末に

貞享三年^{丙寅}二月五日染毫於新玉津嶋宝前

季吟

とあるごとく、本書は北村季吟の編著になる古今集序注であるが、「教端抄」（二二・一一一―解題32）に関連して述べたように、右の奥書は香川県高松市の松平公益会所蔵の「古今序抄」（季吟自筆か、新典社刊『北村季吟古註釈集成別2』に影印されている）の奥書と全く一致する。また前引の注釈部分も松平公益会本のほぼ中間の部分に当り、本文も一致する。掲出本はこのような季吟の「古今序抄」の後半部分のみの零本であつたというわけである。……下略……。

（三）古今伝授関係書

33 古今和歌灌頂卷

写 一冊 一二・一一八

古今伝授書。水色の紙表紙の中央に題簽を貼り、「古今和歌灌頂卷」とある。二三・二×一六・六cm。袋綴。本文料紙は楮紙。一面一行。墨付三三丁。天保三年写。

冒頭は「序 藤原為助郷秘書^{ママ}」とあつて、「大和哥と云事、是は神之言と云はんため也、昔神代には人の物を云ふ

を哥(マ)とよむと申ならはされたり」云々。主として古今序の秘説を記し、「古今和謠灌頂卷 藤原朝臣為助卿秘書」

「古今灌頂之卷（ママ）日本記秘歌也、不可レ及レ他見（ママ）可レ秘（ママ）」とある。

以下「古今和謠灌頂卷」（末尾に「元亨三年七月廿日 冷泉中納言藤原朝臣為助 在判」とある）「古今和歌秘伝 曲文父母之大事」「古今相伝秘中曲文抄廿部」「古今相伝秘事」（末に「古今和謠集相伝秘中曲文抄当家子孫二伝之」とある）を収め、末に「天保三千年中夏大平忠叔写」の書写奥書がある。

本書については、三輪正胤「古今集灌頂伝授の一系譜」（『国語国文学論集 松村博司教授定年退官記念』昭和四八・四）

に詳しい。伝本も四類に分けられ、室町初期写の静嘉堂文庫本も存し、また大東急記念文庫本は古典文庫『中世神仏説話 続』に翻刻もされているから、詳細はそれらに譲る。要するに、元来藤原為顕流の伝授書で、古今集を中心とした和歌を伝説によって意義づけ解説したものであるが、いつの頃か冷泉流の解説が付加されたものである。

なお上記の外、内閣文庫・神宮文庫・九大研究室・九大図書館・宮内庁書陵部・天理図書館（吉田文庫）・東北大学図書館・東洋文庫・八戸市立図書館・祐徳稲荷中川文庫等にも伝本がある。

34 古今和歌集灌頂口伝

写 一冊 一一・一六四

古今伝授書。青地紙表紙の左上に題簽を貼り、「古今和歌集灌頂 完」とある。内題（各巻端作り）は「古今和歌集灌頂口伝 上」「古今和歌集 口伝下」とある。なお、同種のもの（一一・一五三Ⅱ解題54、一一・一六三Ⅱ同55）も同じく「古今和歌集灌頂 口伝」の内題を有している。二七・二×一八・九cm。袋綴。本文料紙は楮紙。遊紙は首一丁、本文墨付四〇丁。江戸後期写。上・下二巻に分かれているが、「五種之人磨の事」の途中「さる程に人磨姓をあらためて赤人と号」の部分から下巻となっていて、本来の区分ではなさそうである。下巻末尾には、

正安元年二月十七日

とあり、本書が為世の作にあらずとも、二条家流のものであることが知られる。『国書総目録』に吉田兼右を著者とするが、兼右は相伝者の一人として認められるに過ぎず、著者は確定できない。……中略……本書は鎌倉時代から南北朝時代を経て室町初中期まで大きな力を持っていた秘伝の集成ということが言えるのである。

なお、掲出本と同系統に属するものに、初雁文庫の二本（解題54・55）のほか、静嘉堂文庫蔵「古今集師資相承血脉譜」所収の「古今和歌集灌頂口伝」（三巻）がある。

35 和歌灌頂次第秘密抄

写 一冊 一二・二〇〇

古今伝授書。但し後半部は別種の和歌秘伝が付加されている。縹色の紙表紙で、外題はなく、内題（端作り）は「和歌灌頂次第秘密抄 二位^{異ニアリ}家隆撰」とある。二四・二×一六・一cm。袋綴。本文料紙は楮紙。本文墨付四二丁。一面一〇行。……中略……「古今和歌集灌頂口伝」（一二・一六三）所引「玉伝深秘卷」がそうであったように、五七五七七の和歌の各句を木火土金水の五行に宛てるのはじめ……中略……有名な「ほのぼのと明石の浦の朝霧に島がくれゆく舟をしぞ思ふ」の各句についても、東・南・西・北・中とか、阿闍仏・宝性仏・阿弥陀仏・釈迦仏・大日如来などを宛て、また梵字をもそれぞれ宛てているのである。

第一三丁裏で一旦本文が終り、一四才は空白のまま一四ウへ入る。すなわち、「古今和歌集能口伝之目録等 条々略記之」と端作りして灌頂の場の説明を記し、「古今和歌集口伝血脉」と再び端作りして天神七代地神五代から人代百皇等を説明し、また「古今和歌集三ヶ口伝血脉図」として「紀貫之—醍醐天皇—（中略）—為相—為秀—為邦—為尹—為之—為富—為広—為和—明融—遊行廿三世—称念寺其阿」とあり、本書が冷泉家流の秘伝の集成であることが知られるが、本書の所々に

天正十九年十二月十六日

遊行廿三世他阿

授与称念寺其阿

とあり、その相伝者が知られるのである。……中略……「玉伝深秘卷」などに含まれている口伝が多く、天正十九年の伝授という記述はそのまま信じてよいと思われる。なお、それを裏づける長々しい奥書があり、その末尾に
右此一巻流伝而羽倉齋稲田宿称荷田氏信盛伝来年久 正徳四、十月十五日伝之者也 相伝之旨不残所
とある。

36 古今和歌集相伝抄深秘密勘

写 一冊 一一・一六〇

古今伝授書。本文共紙の表紙の中央に「古今和歌集相伝深秘抄」と打付書き。内題（端作り）は後記。二八・四×二〇・七cm。袋仮綴。本文料紙は楮紙。一面一〇行。墨付三一丁。江戸末期写。
冒頭部分は左のごとくである。

古今和歌集相伝抄深秘密勘第一

元和哥の本末を明らかにすと云事、只三曲の不思議なり、歌道最深秘密秘也、たやすく名字をも聞すへからず、こゝにその種子あり

一神祇和歌人輪マシ一躰なる故なり、其謂は天地人の三才則哥なり、哥道の実躰とす……

以下、「一、大和歌とは……」「一、大歌所……」から「伊勢哥とは……」に至る、古今集卷二十に関する解説である。次は「古今相伝秘事奥之書」で、「一、伊冊負せとりの事」以下、三鳥三木三草関係の釈で、「一、喚子鳥の事」に至る。

末に、天和二年三月朔日細川丹後守行孝、元録日未三月花房右近の坂本三良兵衛宛の奥書がある。最後のは次のごとくである。

右深秘之伝者、細川幽齋公同氏丹後守殿御伝授、后花房右近殿御伝授之所也、予依年来之懇望今相伝者也

坂本胤重

37 古今二字相伝

写 一冊 一二・一八八

古今伝授書。青色菊唐草文様の表紙で、外題なし。内題（端作り）は「古今二字相伝」とある。二八・七×一九・八cm。袋綴。本文料紙は楮紙。本文墨付九五丁。一面一〇行。江戸中期写。

古今伝授関係や和歌詠作法など、さまざまな歌学書を集成したものとも言える。以下、内容の順を逐って解説する。「古今二字相伝 私云知ヌ是モ切紙也」が冒頭で、「天神七代次第」（「第一国常立尊—陽神 第二国狭槌尊 陽神」以下）、「地神五代次第事」「人皇次第之事」「千葉破ノ大事」以下で、「古今箱伝授」（一二・一六七）と大略同じであるが、末尾の方に若干相違がある。

続いて「短冊寸法」「色紙寸法」等雑々があつて、「切紙口伝条々私云表書也 宗祇」とあるが、これは「和歌秘録」（一二・一八三）解題62）や「古今伝授切紙口伝条々」と同じ。次の「古今集内聞書」も、「和歌秘録」中の「古今集切紙内聞書」と同じ。

次は「古今真名序 宗祇以自筆本写之」で、真名序注。奥に次のようにある。

古今序文字読奉受

逍遙院前内府
実澄公御説了

永正拾四年十月廿三日

于時慶長七年林鐘下澣凌極暑間書等令穿鑿書入訖、僻学之誌之不可許外見者也

丹山隱士

丹山隱士は言うまでもなく細川幽齋である。

次は「増補和歌作法」。先ず「兼題并会衆廻状之事」（「一、兼題は今日以前に題者これを出す……」）。以下、一つ書き形式で短冊・懷紙の書法が図で示され、実陰・通茂・雅胤・雅章らの名が見える。なお、「会席莊嚴の事」など、歌会の作法などが詳記されている。末に「題詠の覚悟」があり、題の本意が解説され、詠作手引となっている。短い一条（末尾から二箇条目）を例示しておく。

一、久恋・経年名立恋・聞恋・見恋・祈恋等はみな不逢恋也

奥書なし。

38 古今和歌集伝授切紙

写 一冊 一二・一五四

古今伝授書。青色布目の紙表紙の左上に「古今和歌集伝授切紙」と打付書き。内題（端作り）も同じ。二三・六×一六・四cm。袋綴。本文料紙は楮紙。一面七行。墨付四六丁。江戸後期写。

内容は三つの部分に分れ、第一部は内題の後、三木之事、三鳥之事を記す。……中略……その後に「享禄_{戊子}仲稷」の清原宣賢の奥書、続いて「元禄二年_{己仲夏}下旬の「平野氏、清原姓、政国」なる人物の奥書がある。

第二部「三箇大事」（「御賀玉ノ木」〈天照大神天の岩戸に籠らせ給ふ時諸神集給ひて榊の上つ枝には……〉「女門に削花指と云事」「加和名草之事」）、「三鳥之大事」（「百千鳥」「呼子鳥」「稻負鳥」）、「ミタリノ翁之事」（住吉大明神之御事也……）と続き、「右古今聞書東家切紙也、東下野守常縁書之 宗祇_{在判}」という奥書を置く。続いて、「名題聞書」として古今集の女性の名等について記し、さらに「二条家・常縁・宗祇・実隆・公条・実澄・藤孝・通村・後水尾院・貞徳・盤斎」と相伝の過程を記す。

第三部は「古今切紙口伝条々 宗祇流」と端作りして、「御賀玉木事」から始まるが、これは「和歌秘録」（一一・一八三）と全く同じであり、また「古今集切紙」（一二・一七一―解題63）、「三鳥伝」（一二・一六五―同64）の前半部（すなわち後半の真名序の注釈を除いた部分）に同じである。

39 切紙口伝条々（三鳥伝）

写 一冊 一二・一六五

宗祇流の古今伝授書。本文料紙と同じ楮紙の表紙の中央に「三鳥伝」と打付書き。内題（端作り）は「切紙口伝条々 私云表書也 宗祇」とある。二四・一×一七・四cm。袋綴。本文墨付四七丁。一面九行。宝暦三年写。

さて、端作りによっても分るように、掲出本の内容は「古今集切紙」（二一・一七二）とほぼ同じである。ただ「古今集切紙」では「内聞書」の中にあった「土台の事」「人丸吉野山の花を雲とよみ」が「内聞書」の前にある点など、全く一致するわけではない。

真名序の注とその口伝の後、「于時慶長七年林鐘下澣……」の幽齋の奥書があつて、「系図」と題して、基俊―俊成を経て寛文二年壬寅五月廿五日に忠方なる人物に伝授された旨の相承系図があり、更に「又稽古方系」として融覚より常縁に至る系譜、宗祇より目守、立卜に至る系譜などを記した後、目録をあげ、「三ヶ大事の内 ヲカタマノ木ノ事」として「ヲカタマの木ノ事、家々儀マチ／＼也。アルカ云、帝御即位ノ時、ミカサ山ノ松ノ枝を取テ、長サ三寸マハリ五寸ニケツリテ……」などと記すように、「伝心集」などの系統に属する幽齋流の古今伝授の内容を持った口伝を続けるが、それ以前の部分とは用字法も異なり、他本による付加と見られる。なお、後表紙の内側（本文の各丁で言えば表の面）に「于時宝暦三^{癸酉}載仲夏写之 直堅（花押）」とある。書写奥書であろう。

40 古今集秘訣（古今集口訣）

写 一冊 一二・一七四

古今伝授書。本文共紙の表紙中央に「古今集口訣 全」とある。内題（端作り）は「古今集秘訣卷之上（下）」。

二〇・〇×一四・〇cm。本文料紙は楮紙。袋仮綴。墨付六五丁（後表紙なし）。一面七行。上代歌謡（万葉仮名）に朱で片仮名のルビを付す。江戸中期写。

内容は上下二巻に分れる。先ず上巻は、冒頭に

古今集秘訣卷之上

宗祇

古今和歌切帅口訣十三ヶ条甚極之秘伝、努々他見有間敷旨奉誓諸神者也、可秘_云

とあり、次に三木三鳥などのことを記す。初めの方若干を記せば、「御賀玉之木の事」（「天照大神岩戸に閉籠り給ひしとき……」以下）「妻戸削華之夏」「加和名種之夏」「三人之翁の夏」「百千鳥之夏」「呼子鳥之夏」「稲負鳥の之夏」「土台之夏」等々、所々に「明応六年五月十五日……」「文龜二年五月廿一日……」の年月日が見え（解題62「和歌秘録」参照）、その後「五首秘中之秘之事」等がある。

下巻は、前述の端作りの後に、「古今集切帅内聞書」（一、初の長哥 延喜の御哥なり）以下一つ書き）で、内外口伝歌（解題62「和歌秘録」参照）ほか、宗祇流の注。友則・躬恒・忠峯のごく短い伝を記す条の後に、以上の古今切紙等は重要なものであることを記し、「文祿三_甲年五月吉日 右宗祇法師自筆以有血判之本写之畢」とある。更にその後一つ書きの条々、「真諦夏」（中略）「八雲神詠」「超大極秘之大事」（文明十六年十二月卜部兼俱）、「化現大事」があり、延宝三年正月夢鷗の、蘭鏡和尚宛奥書を記した後、「一条兼良公自筆伝 古今三鳥伝」（「百千鳥の事、鶯也……」以下）がある。

41 古今伝秘図

写 一冊 一二・一八〇

古今伝授書。朽葉色の表紙の中央に題簽を貼り、「古今伝秘図」とある。内題（端作り）同じ。一二・七×一六・五cm。袋綴。本文墨付五七丁。一面一〇行。巻首に「能代蔵書」の朱方印がある。江戸末期、能代忠義写。

古今伝授関係の書を多数収めたもの。初め一丁（表裏）が「古今伝秘図」で、住吉大明神から貫之・基俊を経、二条・京極・冷泉家に及ぶ系図である。二条家は為衡まで、京極家は為兼まで、冷泉家は為広まで。概して簡略な系図だが、定為・頼阿に詳しい細字注がある。

続いて……中略……次は「古今和歌集見聞懸記抄」で、やはり一つ書形式、古今集序から始まり、和歌風体、故事など、更に「古今和歌集の事 素純」（「一、をか玉の木の事」以下、十二に至る）、十二条があり、「以上十二通常光院二条家切帛畢」、次に「当家自為家直に相伝之分（音縁 三分） 八通」があつてなお一つ書きの秘事が記され、貫之から頼阿に至る奥書、また文明四年六月常縁奥書「当家三鳥口伝」があつて、文明三年八月十五日、五年四月十八日、常縁の宗祇に与える奥書があり、末尾に「書写能代忠義（花押）（印）」とある。この文明三年および同五年の古今伝授の奥書は一応信拠されるものであり、また「古今和歌集見聞懸記抄」の中の条々は、宗祇流切紙十八通と重なる部分もあつて、この書全体は、大体宗祇を中心とした古今伝授関係の書や切紙を集めたものと思われる。

42 古今切紙廿三条

写 一冊 一二・一七七

古今伝授書。琥珀色の表紙の左に題簽を貼り、「古今切紙廿三条口伝 全」とある。内題（端作り）は「古今切紙廿三条」。二四・八×一六・八cm。袋綴。本文料紙は楮紙。一面九行。本文墨付三六丁。江戸中期写。

冒頭部分は次のごとくである。

古今切紙廿三条

一、伊男女勢鳥之事

我門にいなおほせ鳥のなくなへに

今朝ふく風に雁は来にけり

鳴なへには歌ことに鳴故にと心得へし、風の吹なへにといへる、吹故なり、いなおほせ鳥は先せきれいと見へたり……

以下、一つ書きで、「呼子鳥の沙汰」「都鳥と云事」「さき草の物語」「和歌の浦の沙汰」などすべて二三条。次に十六条之大事」として「一、あさなけと云事」以下、「うつふし染と云事」まで一七条を記すが、この部分は徳島県立図書館本「歌の留り字の事」に同様なものがある。続いて、左の奥書がある。

右之一巻、雖為秘事依御懇望令写進之候、住吉玉津寫御照覽、愚身伝受之通少茂不殘候、努々他見不可有之
すゑの露本の雫となりぬともいにしへいまの契りわするな

天文十^辛 丑 歳十月十一日

慶来

次に五丁の「勅撰目録」を合綴する。……中略……「勅撰目録」以下は「東野州聞書」（卷四）を抄出したものである。

43 古今十卷之切紙

写 一冊 一一・一七九

古今伝授書。紙表紙の左に新しい題簽を貼り、「古今十卷之切紙^{天明元年写}」とある。内題（扉左）は「古今三ヶノ大事」とある。二四・一×一七・二cm。袋綴。本文料紙は楮紙。本文墨付二八丁。一面七行。天明元年写。

扉の次の丁に、

古今三ヶ之大事

をかたまの木

めとにけつり花さす

川な草

とある。冒頭部分は次のごとくである。

一、をかたまの木と云は、御門御即位之時三笠山の松の枝を取て長サ三寸まハリ三寸……

三ヶ之大事の次は「古今三鳥之事」、その末に宗祇・肖柏……宗益・不及の名があり、寛文九年仲夏中旬写す旨の本奥書がある。更に「長哥と申は」以下の一つ書き、三才伝、以下一〇枚分の切紙に相当するものを記載している。右の古今十巻の切紙と切紙三通を授ける旨、元禄十四年十月廿一日「大内人秦氏小林久左衛門吉泰（花押似書）」の「世木次郎右衛門殿」宛の本奥書があり、更に伝わって天明元年晩夏仲旬に写したという「大内人秦中英（花押）」の書写奥書がある。

44 古今和歌集相伝之次第

写 一冊 一一・一一七

古今伝授書。表紙左に「古今和歌集相伝之記」と打付書き。扉も同じ。内題（端作り）は「古今和歌集相伝之次第」とある。二三・〇×一六・〇cm。袋綴。本文料紙は楮紙。本文墨付三三丁。一面一二行。江戸末期写。

初めから二七丁は「古今和歌集相伝之次第」で、「初重 文字読付詞之説」以下、「六重」まで並記され、以下本文で、「第一、河飛相松之事 高砂住江之松も相生のやうにもあり……」以下、三木三鳥等の秘事を記す。「第五」に「月やあらぬ」の歌を注するが、「此哥は凡灌頂の大事とも申べき也」云々とあり、いわゆる為顕流灌頂伝授の要素を持つ。以下、「古今二字」「撰者之伝」等があり、末尾は「別帋伝授之事」。終りに六丁ほど、「二条家三鳥三木三草相伝秘密之事」（内題）を付す。「古今和歌集^{マヤ}順三草之事 同灌順 三木之事」以下、「第三 稻負鳥之事」に至る。奥書はない。


成立年時は全く分らないが、中世後期であろうか。伝本は京都大学図書館・天理図書館・静嘉堂文庫等の「古今相伝之次第」が同じものであるが、冒頭は、「初重」→「七重」まで存する。掲出本が六重までしかないのは、「七首

之秘事」という元来「四重」であるべき項を脱しているからで、他にも若干の本文上の相違がある。三輪正胤「古今集灌頂伝授の一系譜」（『国語国文学論集』所収）の注11に、「古今相伝之次第」（内閣文庫本他）は「初重の文字読附詞之説から七重の一首之深秘付三首秘歌まで七段階に分けられている。その内容は灌頂伝授系と切紙伝授系のものが混在しており、両者の接点にあるものとしても注目すべきものである」とあり、参考になろう。

45 八雲神詠和歌三神大極秘口訣

写 一冊 一二・一八二

古今伝授書。青色の地に金箔を散らした表紙の中央に題簽を貼り、「八雲神詠和歌三神大極秘口訣」とある。内題なし。二五・五×一八・二cm。いわゆる折紙列帖（料紙を先ず二つに折り、その折り目を下端にした列帖装）。本文料紙は薄様鳥の子。本文墨付一七丁。一面八行。寛政三年写。

先ず藤原定家の、権大副兼直宛三月九日付の誓紙の写しがある。（「八雲神詠口訣和歌三神并化現之大事者、神道之極秘歌道之奥旨而……」）。以下、印で表されている大きな項目を掲げると、「超大極秘之大事」「超大極秘逸妙二字之口訣」「超大極秘和歌三神口訣」「化現之大事」で終って「右条々之切紙伝授者 神国口訣唯受一人之大事神道之極秘也、依懇志難黙止奉授与四条前黄門者也 從二位侍從下朝臣兼俱判 文明十六年十二月吉辰」とあり、次に兼俱↓四条一品↓左金吾と伝えられたという永正六年三月四日「前博陸侯（花押似書）」の本奥書がある。なお、この前に博陸侯は一条禅閣だとする注記がある。

改頁して「長頭丸伝授之聞書」がある。これは「古今集に人丸一人の歌を入れて……」以下、「……深慎隣右口決伝受也」に至る、人丸に関する伝授である。……中略……要するにこの書は、吉田神道系の歌道伝授書で、貞徳が改変したものである。伝本は多く、大阪府立図書館石崎文庫本・小浜市立図書館本・飯田市立図書館本・九大図書館本（「和歌切紙伝授」に付）・広島大学研究室本・佐賀県立図書館本・東洋文庫本など、枚挙にいとまがない。ただ多

くの本は、掲出本の「長頭丸伝授之聞書」の部分詳しい。即ちそれは他の伝本で「超大極秘人丸伝」とあるものの後半である。奥書は多くの伝本では長雅ぐらいまで共通し、あとはさまざまである。三輪正胤「神道者流」八雲神詠伝の流伝（『ビブリア』71、昭和五四・三）に詳しい論がある。

46 「歌の秘書」

写 一冊 一二・一八六

古今伝授書。唐草模様ある金欄の表紙で、外題・内題なし。『初雁文庫目録』（謄写版）以来の仮題「歌の秘書」。一六・八×八・七cm。折本。本文料紙は鳥の子。表面は上下に金泥で界線を引く。一面五行。但し本文は裏面に続き、終りの方は一面六行。元文五年、叙庸写。

内容は、複数の歌書（主として秘伝書）を合したものである。……中略……この「歌の秘書」は、幽斎を通して貞徳から伝えられたと思われる二条家流の秘伝書を中心とし、三之その他からの説をも若干混えて一つにまとめ、弟子の叙庸に与えたもの。没する前年で、秘書を門弟に託したのであろうか。近世地下派の伝授資料として一顧の価値があろう。

47 古今廿帖之内甚秘口訣切紙伝受（古今切紙伝）

写 一冊 一二・一七六

古今伝授書。本文共紙の仮表紙の中央に「古今切紙伝」と打付書き。内題は後記。二四・二×一七・一cm。袋仮綴。本文料紙は楮紙。墨付二七丁。一面七行。江戸中期写。

冒頭部分は次のごとくである。

古今廿帖之内甚秘口訣切紙伝受

古今云二字秘密大事

古今尔十二諸德儀有里、古尔六の儀今尔六の儀有之と云々

以下「阿古根伝」（内容より判定）、「古今廿帖卷名」「古今仮名序歌作者」「三木の夏」「三鳥の夏」「三人翁和歌三神深秘口訣」「古今金札口訣」「古今廿帖の深秘歌」「古今の濫觴口訣」「歌道読方二条家事我大夏深秘口訣」など。神道説その他によって説き、かなり秘儀化されている。末に玄旨（細川幽齋）より伝授された貞徳居士の奥書があり、その流のものなる事を示した奥書が続いて、

臨風軒 真隆（花押）

于時宝永二乙酉年

臘月日

角谷氏正雅貴丈

とあつて終る。この頃の写と考えるとよさそうである。

48 超大極秘古今内伝受切紙口訣条々（古今集内伝受）

写 一冊 一二・一六八

古今伝授書。褐色鳥の子の表紙左上に題簽を貼り、「古今集内伝授」とある。内題（端作り）は「超大極秘古今内伝受切紙口訣条々」。二七・七×二〇・二cm。袋綴。本文料紙は楮紙。本文墨付二三丁。一面八行。明和七年写。卷頭部分を掲げると、次のごとくである。

超大極秘古今内伝受切紙口訣条々

十八通之切紙近代縮一卷、其故者逮于後代為不紛失也

古今二字 大事 題号之大夏トモ云

第一義 奈良帝ト当代トヲ古今ノ二字ニアツル也……

以下、「古今土台」「古今真体之大事」「古今三方之大事」「古今仮名序発端之詞之大事」などがあり、「物名之

内」に至る一八項目がある。次に延宝九年二月十八日風観斎長雅の本奥書があり、上記は切紙一八通であるが、紛失を避けるために一卷としたもので、東野州常縁・種玉庵宗祇を経て三条西実隆・肖柏に伝えられ、更に玄旨法印、そして明心居士（貞徳）・広沢長孝らを経て風観斎長雅に至った旨を記しているが、この奥書は解題77「古今天真独朗之卷」の延宝九年の奥書と丁度一箇月違いの日付で、文章もかなりよく一致する。次に鷲見氏廸知英へ伝える長雅の宝永六年陽月吉辰奥書、長雅より伝授の二条家奥旨口授を千城ぬしへ伝える享保七年七月七日の嘉珍奥書があり、末に次の書写奥書がある。

士清先生書

拝借
大河内
重平

明和七庚寅十月十五日

謹写

士清は、神道家・国学者の谷川士清であろう。

別項「八雲神詠和歌三神大極秘口訣」（一二・一八二＝解題75）「古今天真独朗之卷」（一二・一五一＝同77）と同系の秘伝書である。

49 家伝書

写 一冊 一二・一四九

古今伝授書。薄鼠色地墨流しの紙表紙で、外題はなく、内題（端作り）は「家伝書」とある。二七・六×二〇・〇cm。袋綴。本文料紙は楮紙。遊紙首一丁、尾三丁。墨付二五丁。一面おおむね一一行。寛延四年写か。すなわち墨付最終丁の表に

和調口伝覚書二十六条、古今集三箇、源氏物語三箇、伊勢物語七箇、徒然草三箇、血脉等之秘訣一卷、季吟老人相承之旨、今与窪田氏松毘子明口授畢写之

享保十九^{甲寅}歲

五月五日

月空庵露川在判

とあり、裏に

于時寛延四^{辛未} 天林鐘下旬

朝聞亭菊籬写之者也

と記して印が押されているが、その時の書写としてよからう……中略……露川は名古屋札の辻に住んだ俳人。寛保三年（一七四三）に八十三歳で没した。初め季吟に学んだが、後に蕉門に歸した。俳風に新味はないが、「六十余ヶ国を巡り其徒に遊ぶ者二千余人」（「北国曲」跋）と誇称するまでの組織力を持っていた。このような伝授も勢力拡大に利用されていたのであろう。なお、前述の古今伝授血脈の後に「二条冷泉正統系図」を記し、その後（すなわち本文の末尾、奥書の前）に三鳥・三木・三草に三種神器をあてる説を付している。

50 三鳥三木切紙伝・古今和哥集次序伝

写 一冊 一二・一六六

古今伝授書。茶色の紙表紙（左上隅破損）の左に題簽を貼って「^{（破損）}三木切紙伝并古今次序」とあり、右に「三鳥伝」、題簽の右にも「三鳥伝」と朱書。内題（端作り）は「三鳥伝 切帋」とある。二四・〇×一六・七cm。袋綴。本文料紙は楮紙。墨付八丁。一面一一行。江戸末期写。

初め一丁半は「三鳥伝 切帋」で「百ちとり 箱伝受に も、ちの鳥なり 正説 鶯なり……」以下三鳥の説と「正説」とを掲げ、「延享五^{戊辰}夏四月吉日 長秀」の奥書がある。次は「三木伝 切帋」で、同様な形態。末に延享五云々の奥書。更に「新玉津島社家森川主馬章信」への「寛延二巳三月」の授与奥書がある。その後に「古今和哥

集次序伝 寛延二巳三月」の端作りがあつて、「初一巻物のなり始たる所なり……」以下、古今集二十巻の各巻の意義づけである。この部分には奥書はない。

51 古今和謡集序・古今六鳥八柏之事

写 一冊 一二・二二六

古今伝授書。素紙の表紙中央に題簽を貼り、「古今和謡集 全」とある。内題は後記。二三・八×一八・二cm。袋綴。本文料紙は薄様鳥の子。墨付一二丁。一面一〇行。元禄十三年写。

内容は先ず古今集の真名序（本文）があり、次に内題「古今六鳥八柏之事」があつて、「啼子鳥事 口伝 息 啼子鳥ト読也」以下一つ書き。次いで「八箇柏の事」「一、このてかしはの事 このてかしとは女の事也……」以下。末に「元禄十三年辰、六月中旬」の一空快岸の書写奥書がある。

52 二条家古今集奥秘口伝

写 一冊 一二・二二二

古今伝授書。本文共の表紙、左に「古今集奥秘口伝并書 全」と打付書き。内題（目録冒頭）は「二条家古今集奥秘口伝目録」とある。二八・〇×二〇・三cm。袋綴。本文料紙は楮紙。かなり虫損がある。墨付七四丁。一面九行。元文二年写。

先ず目録があり、次に本文。

古今題号之奥秘口決

哥は本天地ひらくるときのごゑにてあハひらくこゑ、むハとつる声めハ開くこゑ声三ツにして……

以下、「大和歌并国号之事」「八雲神詠反歌口決」「六種之儀甚深口伝」「六人歌仙勝劣極秘口決」「天皇御即位古今御伝授大秘口決」「仮字序惣体口決」「哥道者王道王道者神道之口決」。目録には、これらの項目を掲げて、以上は「右八箇之大事従中院前内大臣通茂公附属之由」とある。

更に「追加」として、「長哥短哥伝」「混本哥の伝」「題組并四季恋雜之伝」「三鳥之口伝」「歌毎に口授ある事」「三木之事」で、これも目録には、これらの項目を掲げた後に「右者内府公之学頭藤原常樹口授之由^三而、常静翁源高成口伝之^并書也」とある。

本文はほぼ序の順に沿った伝授で、宗祇説が中心のようである。末に「元文二年己卯月日」とある。

53 歌道筒守

写 一冊 一二・二二四

和歌秘伝書。紺地に緑で花鳥（梅に鶯か）を刺繍した緞子の表紙で、無外題。内題（端作り）は「歌道筒守初重之卷 和歌三神秘訣」とある。二三・三×一七・三cm。袋綴。本文料紙は楮紙。墨付五七丁。一面九行。安政四年写。

冒頭は「日本紀神代之卷曰、伊弉諾尊既還乃追悔之日、……」と始まり、尊が汚穢を祓った時に生れた底筒男・中筒男・表筒男命につき記す（筒守の名義はこの辺から出たものらしい）。「底筒男・中筒男・表筒男命、是即住吉大神矣、三筒男命ハ伊弉諾尊清明至極天日一躰ノ御神靈也、三神ニシテ一神也^{伝有}」とあり、以下、「三神御鎮座之事」「天浮橋秘訣二尊御歌之事」「八雲神詠秘訣」に至る。「歌道筒守二重之卷」は「興言之事」「敷島之道之事」「和歌三神之秘訣二重之伝」以下で、「和歌筒守三重之卷」は「真住吉之伝」以下「日留始終之伝」に至る。

主として垂加流神道説によって和歌三神等を説いたもの。末に、「于時安政四年^{丁巳}四月書始／同五月朔日納筆／浪花賑竈軒書之」と書写奥書がある。『大日本歌書綜覧』（上一五九頁）及び『国書総目録』によると、山崎闇齋門

の玉木正英の著、国会図書館・静嘉堂文庫・大阪市立大（森文庫）・大東急記念文庫（享保二十年写）・京大・神宮文庫・慶大・東北大（狩野文庫）・祐徳稻荷中川文庫等に写本を蔵する由である。

54 古今和歌集伝之弁

写 一冊 一二・一二九

古今伝授書。丁字引表紙で、写真には表紙左端に「古今和歌集伝之辨^{近松茂矩}」と記した掛紙が写っているが、現

在は外題なし。内題は「古今和歌集伝之弁 尾張近松茂矩」。二三・九×一六・四cm。袋綴。本文墨付二四丁。一面九一行。安永四年写。と言うのは、本文末尾（「追加」の前）に、「丁未ノ春三月朔旦」「尾府城南泥江ノ邑鍊兵堂」にて「近松彦之進藤原茂矩謹テ書ス」の奥書があり、「追加」を六丁記して、その奥に、

安永四^{乙未}年二月朔日

鳥居彦五郎源直形浄書

とあって、安永四年（一七七五）の鳥居直形の書写本であることが知られる。

内容は、尾州藩士で兵学家の近松茂矩が、古今伝授について、中頃武家・僧侶に伝わって堂上家での伝承が途絶えた結果、伝授が諸国に散在し、誤伝・附会の説が横行している現状を慨嘆し、文明十八年の宋世、寛永十七年の正啓、元禄元年の宗川の伝授目録を記し、次いで貫之以下の伝授の歴史を問答の形で概説したもの。下巻は、更にその追加問答を記す。福井久蔵博士旧蔵本。『国書総目録』に福井氏蔵本として掲載されているのは掲出本で、それ以外に伝本の存在の知られない孤本である。因みに、近松茂矩の略伝は『名古屋市史 人物編第二』に見える。

国文学研究資料館特別展示目録 10

古今集 ―初雁文庫本を中心として―

昭和六十一年十一月一日 発行

編集 国文学研究資料館

発行 整理閲覧部参考室
国文学研究資料館

〒142 東京都品川区豊町一―一六―一〇
TEL 〇三―七八五―七二三一

印刷・製本 株式会社 三協社

〒164 東京都中野区中央四―八―九
TEL 〇三―三八三―七二八一

ISBN 4-87592-020-2